



『白樺』派の文学

本多秋五

昭和30年11月25日 第1刷発行

しらかほ は ぶんがく
『白樺』派の文学

著者 ほん だ しゅう ご
本 多 秋 五

発行者 野 間 省 一

印刷所 技報堂印刷株式会社

発行所 株式 会社 大日本雄弁会講談社

東京都文京区音羽町3ノ19

振替東京 3930

電話大塚(94) 3101・3111・3121

〒 150

(落丁本・乱丁本はおとりかえいたします)

(毛利製本)



『白樺』派の文学

本多秋五



『白樺』派の文学

本多秋五



ミリオンのツグス

裝幀
有井
泰

目
次

『白樺』派の輪廓……………三

『白樺』派の文学

- 一 自己を生かす……………四〇
- 二 「自己」とは何か？……………四二
- 三 「自己」と無意識……………四四
- 四 武者小路と柗太郎の論争……………四六
- 五 後期印象派……………四八
- 六 素質と環境……………五〇
- 七 エリット意識……………五二
- 八 「重荷」からの解放……………五三

九 トルストイ卒業の問題…………… 三

一〇 「自然主義前派」か？…………… 二〇

一一 志賀リアリズム…………… 二六

一二 私 小 説…………… 三四

長与善郎おぼえ書

『青銅の基督』…………… 一三

『竹沢先生といふ人』…………… 一五

『野性の誘惑』…………… 一四

有島武郎論

一 『卑怯者』…………… 一四

二	『迷路』……………	一五
三	思念錯綜……………	一七
四	牛後派……………	一六
五	『カインの末裔』……………	一六
六	『或る女』……………	一七一
七	『大洪水の前』……………	一八三
八	『星座』……………	一八七
九	文学史的位位置づけ……………	一九二
一〇	『惜しみなく愛は奪ふ』……………	二〇四
あとがき	……………	二二五
解 説	……………平野 謙……………	二二七

『白樺』派の文学

『白樺』派の輪廓

『白樺』派の文学が、大正文学の大きな水脈であり、今日にまでそれが及んでゐることは、あらためてここにいふまでであるまい。

『白樺』派の文学上の業績は、吉田精一の『白樺の文学運動』（『近代日本浪漫主義研究』）などによつて、ひとまづ洗ひ上げられてゐるといへる。しかし、『白樺』派の文学が、現在のわれわれに対してもつ意味は、まだけつして明らかにされてゐるとはいへない。

奇妙なことだが、『白樺』派に対する同時代の批評といふものは、いま振り返つてみて、これといふほどのものがないやうである。いはゆる「白樺派の文学運動」、あるひは文学集団としての『白樺』派の存在を葬つたものは、第一次大戦後におこつた社会主義運動であつたに相違ないのだが、社会主義運動ないし社会主義的文芸の側からは、たとへば武者小路実篤の「新しき村」に対する嘲笑的批評などはあつたにしても、『白樺』派の文学全体に対する本格的な論評は行はれなかつたやうである。思ふに、当時の社会主義的思潮は、ガダルカナルに上陸したアメリカ軍が、途中の島々を無視してマキン、タラワ、つづいてクエゼリン、ルオットへと進攻し、その間に散在する島々を軍事上無意味なものと化してしまつたやうに、正面から『白樺』派の

文学とホコを交へることなしに、その社会的存在を浮きあがらせてしまつたのであらう。そのためか、『白樺』派に対する同時代の批評は、もつとありさうである、案外に実のあるものが見当らないのである。生田長江の批評なども、いまあらためて読み返すほどのものではないと思ふ。

ところで、大正のむかし、とつくに社会主義の波に呑み込まれてしまつたはずの『白樺』派の文学は、昭和の中葉から戦争時代を通じて復活し、現在にまでおよんでゐる。雑誌『心』の存在などをいふのではない。志賀直哉の存在に象徴されてゐるやうなものを指すのである。志賀直哉は、紛れもない近代日本文学の精髓として、それに拜跪するにせよ、反撥するにせよ、現になん人もこれをうたがつてゐないのである。そのやうな眼でみれば、『白樺』派の文学が現代文学に滲透してゐる範圍は意外にひろいのである。『白樺』派文学の意味測定は、なほ将来に残された課題であると、くり返していふ必要があるだらうか？

岩野泡鳴も、正宗白鳥も、三井甲之も、また『白樺』派により近い地帯にゐた広津和郎や赤木術平も、さらに阿部次郎や安倍能成のやうな人々も、僕の知るかぎりでは『白樺』派に対して全幅的な批評をしてゐない。では、『白樺』派の文学の本質にふれた批評は、いまだかつてどこにも存在しなかつたのであらうか？

今日、『白樺』派の名によつて、大多数の人々が思ひ浮かべる名前は、まづ武者小路実篤と志賀直哉、そして長与善郎といふところであらう。(里見淳の存在に気づくにはやや時間を要するのではあるまいか。)そのやうなものとして考へられた『白樺』派に対する本質的な批評は、実は同時代にあつた、しかも外ならぬ『白樺』派——本来の、歴史的な意味での『白樺』

派そのものうちにあつた、と僕は考へたい。それが有島武郎であつた、と僕は考へるのである。有島武郎といふ存在そのものが、『白樺』派に対するもつとも本質的な批評であつた——といふことは、第一次大戦後の社会主義運動こそ『白樺』派に対するもつとも有力な批評であつたといふのとは、いささか事情が異なるのである。それは、社会思想による批評ではなしに、社会思想を含むのが当然であるやうな文学思想からの批評であつたからである。

**

雑誌『白樺』は、明治四三年四月に創刊された。

前年の正月には『スバル』が、一〇月には『屋上庭園』が創刊されてゐる。『白樺』創刊の年の五月には『三田文学』が創刊され、おなじ年の秋九月には第二次『新思潮』（小山内・谷崎等）が創刊されてゐる。

当時は、自然主義の全盛期といはないまでも、文学の主流は文句なしに自然主義一派に覆はれてゐたかのごとくいはれてゐる。少なくとも僕などにはそのやうに受け取られて來てゐた。だが、実際はかならずしもさうではなかつたのだ。——といへば、ただちにそこに二つの異論が予想される。当時はまだ自然主義が実際に優勢だつたではないか？ と。また、鷗外と漱石の存在を、いはゆる「享楽派」「頹唐派」の活躍を、かつて誰が見落したか？ と。

たしかに自然主義文学は、雑誌新聞の目次面で優勢を占めてゐたし、とくに地方における文学読者のあり方を察するとき、うたがひもなくまだ当時の支配的潮流をなしてゐた。また、日

露戦争前後からの文学をかたるものは、たれしも「余裕派」「あそびの文学」ないし「唯美主義的」諸傾向の文学に言及するのを忘れなかつた。しかし、自然主義文学を主とし、非・自然主義文学を従とするその比例、あるひはその主従関係の意味づけには、今からみて何か納得しがたいものがあつた。

昭和のはじめにおこつた「明治文学研究」の第なん次かの波は、史的唯物論の近代日本文学史への適用の試みであつた。少なくとも、そのやうな試みにそれはみちびかれたものであつた。当時の研究者たちの注意は、プロレタリア・リアリズムにもつとも縁故ふかい自然主義文学にこそが、自然主義文学の前身としての透谷等『文学界』の活動などは、プロレタリア・ロマンティズムに通ふものもあり、好んで研究対象にえらばれたとはいふものの、要するにその風潮は自然主義文学中心を特徴としてゐた。研究者たちの文学的嗜好もまた、この系統の文学に多く親近を感じてゐたと思ふ。したがつて、自然主義系統以外の文学は、鷗外その他、抜群の存在は例外として、おのづから度外に閑却される結果を生じた。そこに意識せぬ文学的視野の限界が生じ、その限界のなかで一種の通念が形成され、それが僕等におよんでゐたと思ふ。

戦時下のある代表的批評家は、明治四〇年代の文学は撩乱と咲き競つたが、これを時代と文学の關係からみると、そこにある「粗雑な關係」があつたといひ、明治以来の日本の文学は、固有の内的必然にもとづくよりも、より多く西歐文学の輸入によつて誘発されたのであつた、自然主義文学にいたつて、それがはじめて「自己の文学史的歴史性」において時代を把握するにいたつた、と書いてゐた。すなはち、「日本の近代文学は、内的にも外的にも、自然主